

ABANDONED DONKEYS

ブラジルを悩ますロバの野生化

PHOTOGRAPHS BY NADIA SHIRA COHEN & PAULO SIQUEIRA

欧州大陸からブラジルにロバが連れてこられたのは16世紀のこと。気性が穏やかで働き者のロバはその後数百年間にわたり、水の運搬や農作業を担う重要な労働力として国の発展を支えてきた。

だが水道が敷設され、自動車やバイクが普及し、トラクターなどによる農業の機械化が進んだ20世紀半ば以降、その存在意義は薄れる一方だ。飼い主に捨てられた無数のロバが野生化した結果、最近ではブラジル北部各地でトラブルを引き起こし、厄介者扱いされるようになってしまった。

食料を求めて、ロバがゴミ置き場をあさる光景は日常茶飯事。自分たちの集落からロバを閉め出して近隣の町に捨てて行く行為が問題となって、警察が出動したこともある。力が弱くて労働力になりにくい雌から捨てられるケースが多いことも、野生化したロバの繁殖を加速させている。

ロバが引き起こすトラブルの中でも特に深刻なのは、ハイウェイなどに侵入したロバによる交通事故だ。リオグランデ・ノルテ州では13年1月から今年6月までの2年半に動物と車両の接触による死亡事故が51件発生

しており、大半はロバが原因とみられる。トラックにはねられたロバの死骸が路肩に転がっている光景も珍しくない。

行政も手をこまねいてきたわけではない。リオグランデ・ノルテ州当局は11年、ロバ肉を食用に加工して学校や刑務所での給食に使用したり、中国に輸出する案を検討した。しかしロバを食べる習慣がない国民の猛反発に遭い、撤回せざるを得なかった。

用済みになったロバに活躍の場を与えようとする取り組みもわずかながらある。バナナ栽培を手掛けるトロピカル・ノルデステ社は、バナナの木が並ぶ農園での力仕事にロバを活用。ロバをミツバチから守る防護服を作り、蜂蜜の運搬などに利用する養蜂農家もある。

ロバのミルクにも注目が集まっている。自然の抗生物質といわれる酵素のリゾチームが人間の母乳の2倍含まれており、リウマチ患者や牛乳アレルギーの子供にいいというのだ。

赤ん坊のイエス・キリストを背に乗せて運んだという言い伝えから、ロバはブラジルで神聖な存在としてあがめられてもきた。彼らが再び愛される存在となる日は来るのだろうか。

N

農作業や運搬の仕事を担う貴重な存在として重宝されたロバが、今では野生化してドライバーを脅かす

Picture Power

(右から反時計回りに)完全装備で蜂蜜を運ぶ養蜂農園のロバ、ブラジルではロバは赤ん坊のイエス・キリストを運んだ神聖な動物としてあがめられてきた、バナナ栽培にロバの力を活用しているトロピカル・ノルデステ社



リオグランデドノルテ州の州都ナタールの海岸ではロバ乗りが観光客に人気(上)、水の運搬に今もロバを使っている地方もある(左下)



フランスのNGOの支援によって設けられたロバの保護区域。路上などで保護された5000頭ものロバが暮らしている(上、右下)



(このページ右下から時計回りに)路肩に残るロバの死骸、野生のロバによるゴミあさりが必要な問題に、80年代まで稼働していたロバ肉の加工工場、ロバはバイクや車に取って代わられた



Photographs by Nadia Shira Cohen & Paulo Siqueira

Picture Power

撮影:ナディア・シーラ・コーエン&パウロ・シケイラ

コーエンは米ボストン生まれで大学院で写真を学びAP通信、シバ通信などを経てフリーに。シケイラはブラジル出身で広告やスタジオ写真からドキュメンタリー写真へと転向した。2人の子供を持つ夫婦で、ローマ在住